

新吉は空腹でもあつた。

暫らくして巡査が来て、警察へ来いと云ふ。

十二三丁もある警察まで仕方がないので行つた。

薄暗くなつてゐた。

留置場へ案内した。

門番みたいな男が居た。新吉は観音經を大きな聲でやつた。

二十分ばかりやると巡査が来て「驛員が迎ひに来たから、一緒に停車場へ行きたまへ」と云つた。

何の事だか解らなかつた。

驛員は若い脊の低い男だつた。

「驛の構内は警察の管轄範囲外だから、大丈夫です、今度は汽車に乗れます」と言つた。

ずつと他の乗客と離れて最端に立つてゐた。

汽車が来た。